埼玉県納税貯蓄組合総連合会優秀賞

税金とたすき

所沢市立上山口中学校
二年　秋山　駿太

小中学校で授業を受けるにあたって必要となってくるものの一つが教科書である。

僕は五年前に海外へ転校することになったとき、転入先の日本人学校で使用する教科書を母と買いに行ったことがある。その時は購入した冊数が数冊であったにもかかわらず、それほど安い金額ではなかったことを覚えている。

教科書を購入しに行った当時は何も疑問を抱くことはなかったが、今よく考えれば小学校入学から現在まで学校から配布された教科書はすべて自分で払ったことはないことに気がついた。そこで今回、今までなぜ自分が使う教科書にお金を払うことがなかったのかを調べることにした。

結論からいうと、小中学校で使用する教科書の無償化制度があるからだ。この制度は昭和三十七年四月一日から「義務教育教科書無償給与制度」により、国の将来を担う児童生徒に対して国民全体の期待を込めて国民の税金で実施されている。僕はこのことを知って、全国の小中学校で使用する教科書はいくらくらいなのだろうと疑問に思い、さらに調べてみた。

日本には約三万校の小中学校があり、一校に約一四〇万円以上教科書代がかかるため、単純計算で四〇〇億円以上かかることを知った。毎年約四〇〇億円以上が国民の税金よって教科書代として支払われていくと考えると、どれだけの金額がこの教科書無償化制度に費やされているのか僕は衝撃を受けた。

それと同時にたくさんの大人によって支えられていたことを知った。また、将来自分たちが大人になったとき、いままで見えないところで支えてくれていた大人の人たちが暮らしやすい世の中を作る努力や、次の世代の子どもたちに対して同じようにお金の面で支援、学習しやすい環境の整備をしていかなければならないという使命を僕らは感じる。

「誰かにしてもらったから次は自分がしてあげる番だ。」教科書について調べたことによってこの発想が生まれた。この考えがよりよい世の中にしてくれるのではないかと僕は思った。

つまり、税金はただの「お金」ではなく、次世代に中心を受け渡していく「たすき」のようなものではないかと僕は感じた。僕は今後この「たすき」を途切れさせることなく受け渡せる大人になりたい。